

第4章 三堡校時代





台中市大甲區 鎮瀾宮

1 三堡校

文昌校は、生徒数の増加に加え、明治40（1907）年、4学年制から6学年制になって、収容が困難となった。三堡の新校舎に移ったのが明治42（1909）年のことで、そこは、鎮瀾宮に近い大甲街の中心地にあった。新校舎は、大甲帽蓆評議員の李進興が自分の田畑を寄付し大甲区街長朱麗の支援で完成したもので、敷地3,000坪、校舎は木造で、真ん中が職員室、向かって右側から順に1年生から6年生が入り、校舎の南西側は段下がりとなって運動場があり、文昌校とは違って広々としていた。正門は南東に位置し、鎮瀾宮前の順天路に通じていた。生徒も300名と増え、教師も金子校長以下10名（日本人教師4名、台湾人教師6名）で、台湾人教師は大抵が哲太郎の教え子で、台北や台中の師範学校卒であった。学校は和気あいあいとして、生徒もよくなつき、学業の成績も、ぐんぐん上がっていった。

大甲公学校は、昭和12（1937）年に、500メートル北方の、現在の大甲國民小學の地に移り、三堡校跡は、現在、商業地区となっている。

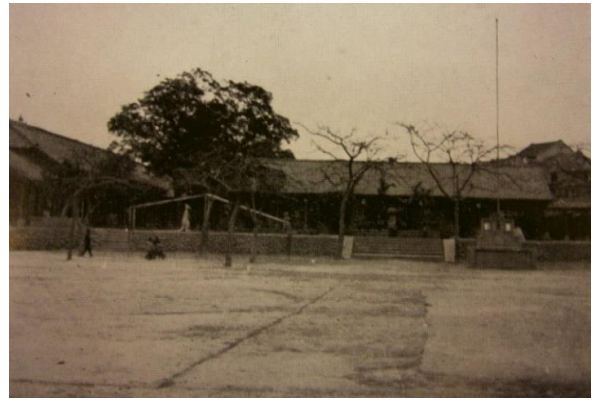
	 <p>新校舎支援 大甲区街長 朱麗 当時38歳</p>	 <p>土地寄贈 李進興 当時33歳</p>
--	---	--



大甲公学校航空写真 昭和10年(1935) 撮影「大甲老照片一」引用



正門 昭和2(1927)年金子校長退職慰勞
祝賀記念撮影 (大甲老照片引用)



国旗掲揚台昭和2(1927)年撮影
(大甲國民小學提供)



職員室(正面)・教室(左)昭和2(1927)年撮影 (大甲老照片引用)



ガジュマルの木
昭和2(1927)年撮影
(大甲國民小學提供)



校長 教諭
金子政吉
当時39歳



訓導
陳嘉瑜(教え子)
当時21歳



雇
志賀哲太郎
当時44歳



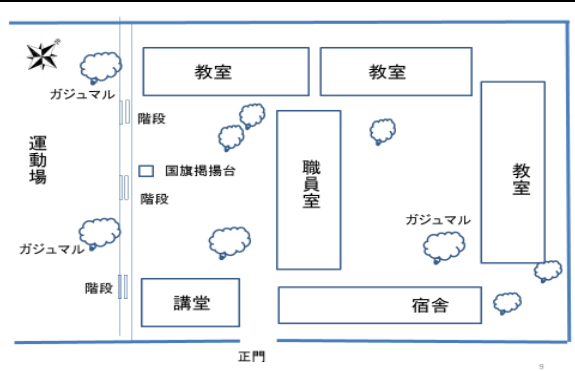
雇
黄並傳(教え子)
当時22歳



雇
莊龍
当時35歳



朝礼 昭和13(1938)年撮影 (大甲老照片引用)



大甲公学校平面図



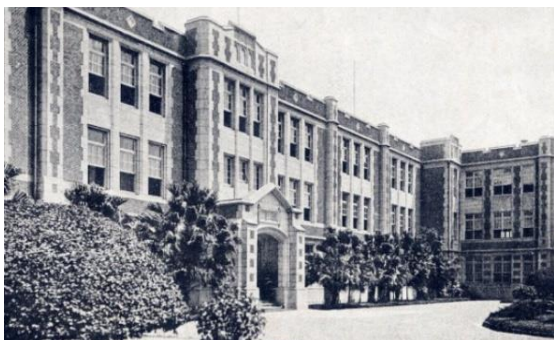
祝賀イベントで行進する公学校生 (大甲國民小學提供) 昭和11年撮影 右の建物は鎮瀾宮北側の徳美商店

○大甲公學校 苗栗三堂
 教諭
 學校長(兼四) 金子政吉 威
 (月彦) 池羽六郎 美盛
 訓導 (月彦) 陳嘉瑜 慶
 囑託 (月彦) 陳嘉瑜 慶
 大甲在勤會 升田 良造 (月彦) 洪氏 敬慶
 職 志賀哲太郎 繁 (月彦) 葉 園慶
 (月彦) 吳海 涼慶 (月彦) 莊 龍慶
 (月彦) 黃並 傳慶

M42大甲公学校職員 (台湾總督府職員録引用)



陳嘉瑜の教員免許状 (大甲國民小學提供)



台中師範學校 (台北写真帖引用)



台北師範學校 (台北写真帖引用)



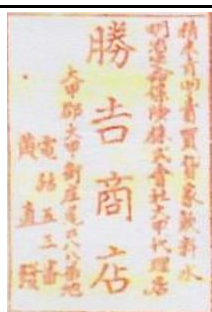
大甲街図昭和12年 (大甲区公所提供)



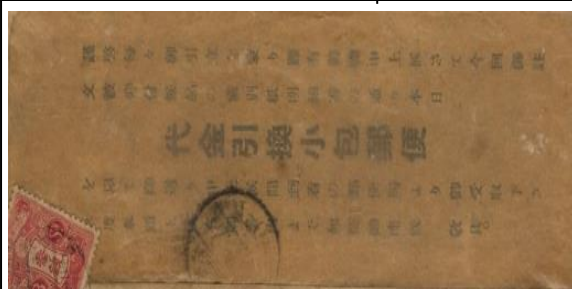
市場内の塩販売所 (昭和初期撮影)



初代台中駅 (臺灣写真帖引用)



酒店「勝吉」広告 (大甲区公所提供)



代金引換小包郵便 東京三越呉服店 通信販賣部大正7年 (杜香國文書引用)



大甲駅にある復元の日本舎宅 哲太郎の宿舍の窓と酷似H29. 11撮影



大正時代の銀座三越 (三越のあゆみ引用)



大正時代の銀座三越通信販売記事 (引用同左)

3 近隣の教え子たち

哲太郎の宿舎の近隣には、教え子の家をはじめ、教え子が勤務する役場、組合、会社、店等が多かった。教え子達は、杜香國、陳啟明、王對、王燕翼、高積前、王守勇、郭展亨、杜瑞抱、黄直發、林麒麟などで、卒業してから社会人として、それぞれが活躍していた。

この頃、正月になると、彼らをはじめとする大甲公学校の卒業生が、年始の挨拶のため、次々と哲太郎の宿舎を訪れ、哲太郎はソデの料理でご馳走を振る舞い、部屋は割れんばかりの祝宴が毎年のように続いた。ソデにとっては一番忙しい時期であった。



昭和12年大甲街地図（大甲区公所提供）

1 王對宅

王對
T 7 卒



王對宅（王澤佳氏提供）

2 杜清宅

杜清
（香國の父）



杜香國
M39 卒



杜清宅（臺灣郷土全誌引用）

3 大甲基督教會

王守勇
T6卒
S9教會



大甲基督教會 (大甲區公所提供)

4 精米工廠

T11~15
郭木榮



精米工廠 (大甲區公所提供)

5 大甲信用組合



T4~5
專務理事
黃清波
M40卒



大甲信用組合 (大甲區公所提供)

T4~9
常務理事
陳煌
M42卒



T4~10
書記
林麒麟
M40卒



T2~8
評定委員
許天奎
M38卒



T9~
理事
陳藻分
元同僚教師



T4~7
理事
吳淮水
M43卒



T8~9
理事
李進興
教え子の父



6 徳明商店跡

T14開店
陳啟明
M38卒



現在の徳明商店跡 建物は当時のまま H29. 11撮影

7 酒店「勝吉」

父黄木材の後を
S6に引き継ぐ
黄直發M44卒



酒店「勝吉」 (大甲区公所提供)

8 役場



役場 (大甲区公所提供)

T7~S1
書記
李欽水
M42卒



T7~12
書記
鄭進丁
M45卒



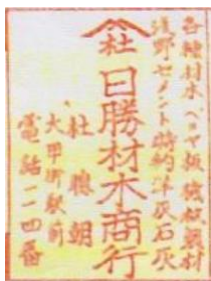
T12~S4
書記
黃焜龍
T1卒



大甲街役場
郭元鐘
T3卒



9 日勝材木商行

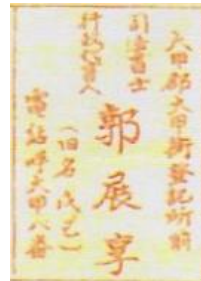


昭和12年広告 (大甲区公所提供)



S4開業
杜聰朝 M45卒

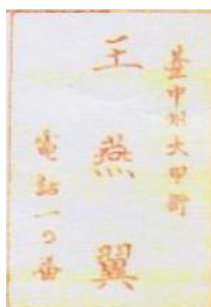
10 郭司法書士



昭和12年広告 (大甲区公所提供)



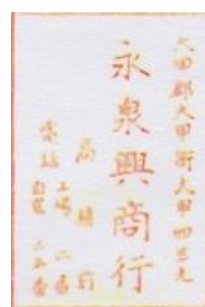
司法書士
郭展亨 卒業不詳



昭和12年広告 (大甲区公所提供)



中南拓殖會社長
王燕翼 M43卒



昭和12年広告 (大甲区公所提供)



中部米穀協代表
高積前 T11卒

4 同郷人

大甲には、熊本県人も多かった。哲太郎と最も親しかった米村嘉平は、熊本の歩兵第十三連隊の軍夫として台湾に来て、征討が終わった後、大甲に住み着き、始めは旅館を営業、それから料理屋その他いろいろやったが失敗し、市場の管理人となった。日本語と台湾語をチャンポンにして声高くしゃべり、市場出荷人から税を取り立てる大甲の内地人（日本人）の名物男であった。哲太郎のところに時々やって来てはしゃべりまくっていた。


上野齊公医も親しかった。明治44（1911）年に大甲公学校の公医となり、蔣公路に開業していた。熊本県八代出身で、典型的な肥後モッコス。頑固で不親切、横柄な面があった。しかし、この人も哲太郎の感化を受けて、生徒との間もよくなり、慕われるようになった。彼は生徒の内地留学に学資を出してやったりするようになった。歴史家楊杏庭（1909.8.9～1987.6.4）も支援を受けた一人で、同人の経歴記録に「1935.4入東京文理科大學一年級。大甲之上野齊醫師提供學費」と、上野公医の学費支援の記載がある。哲太郎は、時々訪問しては酒杯を共にし、公医自慢の浄瑠璃をほめてやったりした。また体調を崩したときは、すぐ診察を受けた。上野公医は尊敬する哲太郎に漢詩を贈っており、その漢詩は哲太郎の妹の御子孫澤田寛旨氏のもとで表装され、額入りで保管されている。漢詩は大甲溪から大甲城を望んで作られたもので、「沙梅疏遠認古城、白帆斜書夕陽行、豊瑞蘆苑蒼茫盛、鷗自照々波自清 松江郎事贈 志賀仁兄大人 齊」と書かれている。「水辺の梅の木はまばらに遠く、その中に古城を見つけた。川には白い帆掛け、船が白い線を書くように夕日の下を行く。豊瑞の芦の公園に、草木が青々と繁り、空の鷗は悠々と羽を拡げ、川の波は清らかである」という意味である。熊本市上通町の紀伊進氏（大正13年生、大甲公学校卒）の話では、上野公医は大甲で亡くなられ、戦後、家族は上野の出身地八代に帰り米屋をされたそうである。

哲太郎は、上野公医宅の筋向いにあった唯一の日本旅館「緑川旅館」の主人やその後を継いだ「富家旅館」の龍富助の所にも時々立ち寄って歓談したりした。富屋旅館は終戦まで営まれたそうである。

大甲の警察や公所にも熊本人がおり、哲太郎もやり易かったようで、彼らと会うと熊本弁で語り合った。大正13年前後の資料を見ると、警察課松島警部、帽子検査員谷口一男、助役柴田一平と同郷人が多い。

現在、米村が管理していた市場は第一市場、上野公医宅は「主幼商場」、富屋旅館は「租」という店になっている。上野宅の西側にあった日本人小学校に通じる道は現存する。

また、山鹿の歌人宗不早が哲太郎のところに立ち寄った話があるが、台湾側の記録では、その事実は確認できなかった。

 <p>公医 上野齊 (八代市出身)</p>	<table border="1"> <tr> <td>明治39(1906)年</td> <td>嘉義医院 囑託</td> </tr> <tr> <td>同上</td> <td>嘉義庁警務課 囑託</td> </tr> <tr> <td>明治40(1907)年</td> <td>台中庁公医</td> </tr> <tr> <td>明治43(1910)年</td> <td>台中庁牛罵頭公学校</td> </tr> <tr> <td>明治44(1911)年</td> <td>台中庁大甲公学校</td> </tr> <tr> <td>同上</td> <td>台中庁公医</td> </tr> <tr> <td>大正12(1923)年</td> <td>鉄道部分課未定</td> </tr> <tr> <td>昭和9(1934)年</td> <td>鉄道部庶務課</td> </tr> <tr> <td>昭和10(1935)年</td> <td>台中州公医</td> </tr> <tr> <td>昭和12(1937)年</td> <td>同上</td> </tr> </table>	明治39(1906)年	嘉義医院 囑託	同上	嘉義庁警務課 囑託	明治40(1907)年	台中庁公医	明治43(1910)年	台中庁牛罵頭公学校	明治44(1911)年	台中庁大甲公学校	同上	台中庁公医	大正12(1923)年	鉄道部分課未定	昭和9(1934)年	鉄道部庶務課	昭和10(1935)年	台中州公医	昭和12(1937)年	同上	
	明治39(1906)年	嘉義医院 囑託																				
同上	嘉義庁警務課 囑託																					
明治40(1907)年	台中庁公医																					
明治43(1910)年	台中庁牛罵頭公学校																					
明治44(1911)年	台中庁大甲公学校																					
同上	台中庁公医																					
大正12(1923)年	鉄道部分課未定																					
昭和9(1934)年	鉄道部庶務課																					
昭和10(1935)年	台中州公医																					
昭和12(1937)年	同上																					
<p>上野醫師の台湾総督府での経歴</p> <p>上野公医が哲太郎に贈った漢詩（澤田寛旨氏提供） ▶</p>																						



上野公医宅跡
(現「主幼商場」店) H29. 11撮影



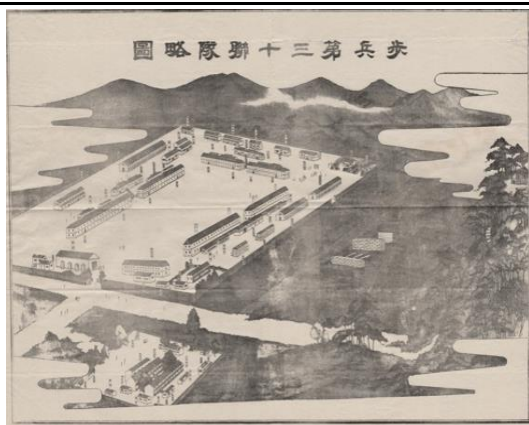
上野宅西側の小道は現存、正面が日本人小学校跡
H29. 11撮影



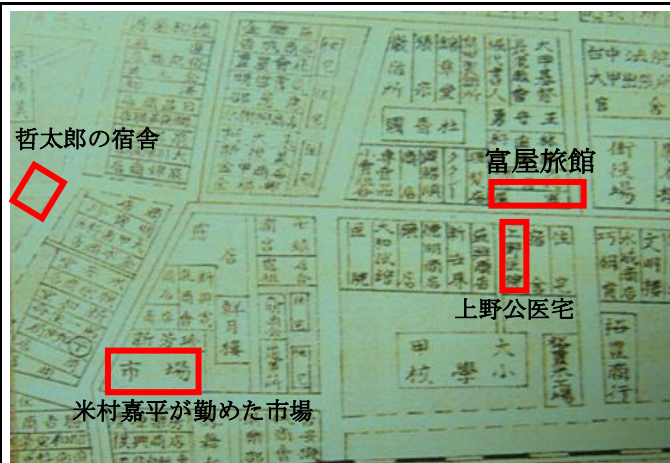
管理人米村嘉平の市場（現第一市場）H29. 11撮影



富屋旅館跡（現「租」店）H29. 11撮影



米村嘉平が軍夫として従軍した
歩兵第十三連隊略図



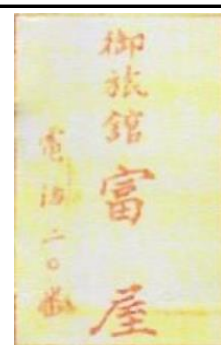
昭和12年大甲街図（大甲区公所提供）

西元	歳	記事
1909	0	楊杏庭生於台中清水梧棲
1923	14	三月，畢業於梧棲公學校。四月，考入第一屆台中師範學校
1929	20	三月，中師畢業，分發於龍泉公學校任教五年級。
1932	23	四月，調職大甲公學校。
1934	25	三月，辭職小學教員。四月，入東京高等師範教育研究科進修。
1935	26	四月，入東京文理科大學一年級。大甲之上野齊醫師提供學費。

上野齊が学費を支援した歴史家楊杏庭の経歴
(資料由徐子雯收集整理引用)



歴史家楊杏庭著
「蒋介石票伝」



昭和12年富屋旅館広告
(大甲区公所提供)

5 漢学抹殺反対

哲太郎が大甲公学校に赴任した翌年の明治33年から、漢学廃止論争がはじまった。守屋善兵衛が明治31（1898）年から経営した台湾日日新報の紙面で漢文抹殺の状況をみると、明治34（1901）年11月には、漢文は8面のうち2面に減少した。そのような状況を背景として、明治38（1905）年7月1日から、漢文4面の「漢文台湾日日新報」が、別途、独立発刊された。しかし、明治44（1911）年11月30日からは、財政難によって漢文独立版は廃止となり、日本語版の中の2面が漢文であった元の形態に戻った。この漢文2面も昭和12（1937）年4月1日、ついに廃止となった。

大正2（1913）年2月、総督府が漢訳文廃止を告示すると、台中樸社社員清水の蔡惠如、霧峰の林幼春などが、漢文化衰退阻止に向けた活動を始めた。

こうした中、平素から民族平等、相互尊重を主張していた哲太郎は、総督府の政策に反対するとともに、率先して台湾社会における「漢学」の教育に没頭した。哲太郎の献身的な台湾人子弟に対する崇高な教育精神は、大甲街民のみならず、当時の台湾人社会の敬仰の的となった。しかし、一方で、哲太郎自身は、理想と現実の相違に日夜悩んでいた。哲太郎は、漢学廃止に反対し、従来どおり公学校用の漢文教科書を使って文昌祠の東西廂で漢学教育を行っていたが、東西廂は1年生と幼稚園児が使用することになり、教室不足から漢学の授業ができなくなった。

大正10年、台湾文化協会ができること、哲太郎は、台湾人子弟に対し、同協会の運動に従事するよう奨励した。大正11年（1922）、台湾教育令の改訂により公学校の教科から漢文が排除され、漢学教育はできなくなった。しかし、大正13年、王進財が漢学を復活させ、武術との文武両道の教育を行い、その後、教え子の黄雀が引き継いで漢学教育にあたった。

 <p>台湾日日新報社、日本文新報と漢文新報 (台湾日日新報簡介引用)</p>	 <p>哲太郎 漢訳文廃止告示時 当時47歳</p>	 <p>漢文運動家 台中清水 蔡惠如 当時31歳</p>	 <p>漢文運動家 台中霧峰 林幼春 当時32歳</p>	 <p>漢学塾 講師 黄雀 (教え子)</p>										
<table border="1"> <tr> <td>王進財</td> <td>昭和十二年</td> <td>1937</td> <td>交通局苗栗郵便局</td> <td>通信手</td> </tr> <tr> <td>王進財</td> <td>昭和十三年</td> <td>1938</td> <td>交通局苗栗郵便局</td> <td>通信手</td> </tr> </table> <p>王進財の経歴（台湾総督府職員録引用）</p>					王進財	昭和十二年	1937	交通局苗栗郵便局	通信手	王進財	昭和十三年	1938	交通局苗栗郵便局	通信手
王進財	昭和十二年	1937	交通局苗栗郵便局	通信手										
王進財	昭和十三年	1938	交通局苗栗郵便局	通信手										
 <p>公学校用の漢学教科書（大甲國民小學提供）</p>	 <p>大正八年撮影の台中樸社（前列左から2人目は林献堂）</p>													

6 金子校長罷免

文昌祠は、明治44（1911）年9月4日から、台中尋常高等小学校大甲分教場（日本人の小学校）になった。「志賀哲太郎傳」によれば、台湾人子弟は昔のことが忘れられず、文昌祠に行っては教室を覗いたり、庭で遊んだりした。それが分教場の授業の邪魔になるということで、小島という分教場主任が台中庁に訴えた、とある。小島主任について当時の台湾総督府職員録を調べたところ、大甲分教場へ派遣された教師は4人で、その中の姓に「小島」はなかったが、「小池」はあった。

この訴えにより、金子校長は、監督不行き届きという事で、大正2(1913)年に停職となった。その裏には、金子校長が台湾人と仲が良すぎると密告した者がいたという事情があった。生徒やその親達は全校挙げて当局の処置を怨み、留任運動を起こしたが、力及ばず、校長は辞任するに至った。金子校長の辞任が街民に与えた衝撃は深刻なものがあり、授業も手につかぬ有様であった。哲太郎も金子校長の留任について深く期する所があったが、どうにもならなかった。

台湾総督府の金子校長に関する記録では、大正3(1914)年1月1日、退職料證書下付（退職金證書交付）、3月1日免官（辞職）となっている。金子校長は、昭和13(1938)年12月30日、脳溢血で亡くなり、翌年、教え子の杜香國、王燕翼らによって大甲公学校内（現大甲國民小學）に記念碑が建てられた（現在は撤去されている）。享年68歳 茨城県出身。（杜香國 中央研究院資料引用：張慶宗氏提供）

	<p>○臺中尋常高等小學校 街 藍興堡臺中</p> <p>教諭 學校長兼五</p> <p>(月三) 玉井 郷方 (月三) 木村 源次郎 (月三) 打方 新治 (月三) 田村 勉 (月三) 岩武 清司 (月七) 伊藤 實一 (月三) 小池 秀勝 (月三) 淺谷 時光 (月三) 石騰 敏規</p> <p>大甲派遣教員留任</p>																																							
<p>金子校長を罷免処分とした台中庁（臺灣寫真帖引用）</p>	<p>金子校長を訴えた小池主任（台湾総督府職員録）</p>																																							
<p>○大甲公學校 苗粟三堡大甲街</p> <p>教諭 學校長(兼三)</p> <p>訓導 (月三) (月三) (月三) (月三) (月三) (月三) (月三) (月三)</p> <p>金子 政吉 鈴木 寛 陳 嘉瑜 郭 彩鳳 陳 瑞圻 杜 抱負 志賀 哲太郎 黃 並傳 何 氏 春</p> <p>大正2年大甲公學校教職員 (台湾総督府職員録引用)</p>	<table border="1"> <tr><td>明治30 (1897)</td><td>嘉義県雲林国語伝習所</td><td>助教諭</td></tr> <tr><td>明治32 (1899)</td><td>台中県大甲公学校</td><td>教諭</td></tr> <tr><td>明治35 (1902)</td><td>苗栗庁大甲公学校</td><td>教諭</td></tr> <tr><td>明治42 (1909) 11月</td><td>台中庁大甲公学校</td><td>教諭</td></tr> <tr><td>大正 2 (1913)</td><td>台中庁大甲公学校</td><td>教諭</td></tr> <tr><td>大正 3 (1914) 1月1日</td><td>退職料證書下付</td><td></td></tr> <tr><td>大正 3 (1914) 3月1日</td><td>免官</td><td></td></tr> <tr><td>大正 3 (1914) 12月1日</td><td>総督府工業講習所</td><td>書記任用</td></tr> <tr><td>大正 4 (1915)</td><td>総督府工業講習所</td><td>書記</td></tr> <tr><td>大正 8 (1919)</td><td>台北工業学校</td><td>書記</td></tr> <tr><td>大正10 (1921)</td><td>台北第二工業学校</td><td>書記</td></tr> <tr><td>大正12 (1923)</td><td>台北工業学校</td><td>書記</td></tr> <tr><td>昭和 2 (1927)</td><td>台北工業学校</td><td>書記</td></tr> </table> <p>金子校長の人事記録（台湾総督府職員録引用）</p>	明治30 (1897)	嘉義県雲林国語伝習所	助教諭	明治32 (1899)	台中県大甲公学校	教諭	明治35 (1902)	苗栗庁大甲公学校	教諭	明治42 (1909) 11月	台中庁大甲公学校	教諭	大正 2 (1913)	台中庁大甲公学校	教諭	大正 3 (1914) 1月1日	退職料證書下付		大正 3 (1914) 3月1日	免官		大正 3 (1914) 12月1日	総督府工業講習所	書記任用	大正 4 (1915)	総督府工業講習所	書記	大正 8 (1919)	台北工業学校	書記	大正10 (1921)	台北第二工業学校	書記	大正12 (1923)	台北工業学校	書記	昭和 2 (1927)	台北工業学校	書記
明治30 (1897)	嘉義県雲林国語伝習所	助教諭																																						
明治32 (1899)	台中県大甲公学校	教諭																																						
明治35 (1902)	苗栗庁大甲公学校	教諭																																						
明治42 (1909) 11月	台中庁大甲公学校	教諭																																						
大正 2 (1913)	台中庁大甲公学校	教諭																																						
大正 3 (1914) 1月1日	退職料證書下付																																							
大正 3 (1914) 3月1日	免官																																							
大正 3 (1914) 12月1日	総督府工業講習所	書記任用																																						
大正 4 (1915)	総督府工業講習所	書記																																						
大正 8 (1919)	台北工業学校	書記																																						
大正10 (1921)	台北第二工業学校	書記																																						
大正12 (1923)	台北工業学校	書記																																						
昭和 2 (1927)	台北工業学校	書記																																						



金子校長歡迎記念 昭和3年撮影(大甲老照片專輯二引用)



金子政吉校長
退職時 44歳



金子校長退職時
哲太郎 49歳



金子校長記念碑建立時
杜香國 45歳



金子校長記念碑建立時
王燕翼 47歳

(二) 大甲公學校同事書信
金子政吉與志賀哲太郎為杜香國於明治45年(1912)在大甲公學校任教時的日籍同事。志賀哲太郎是位模範教師，並熱心處理地方事務，被當地居民尊為「大甲的聖人」。大正4年(1915)投水自盡後，地方仕紳籌措經費，於鐵砧山上建立紀念碑。⁵³ 大甲公學校初代校長金子政吉於昭和4年(1929)過世後，杜香國與王燕翼等人因感念其生前之功績，曾於昭和9年(1934)5月13日，在大甲公學校召開建碑磋商會。與會者四十多人，商議建立金子政吉氏石碑，但當時的結果是募集所得金額不足，仍有待加強勸募。⁵⁴



杜香國らが中心となって金子校長の石碑を建立
(杜香國文書引用：大甲区公所提供)



金子先生記念碑除幕式 昭和14年(1939)12月
大甲老照片專輯二(提供黃經業)」引用



金子校長石碑建立場所
(現大甲國民小學正門右手が石碑跡)

文 大甲女子公学校

● 文昌祠

昭和12年(1937)大甲街図(大甲区公所提供)

7 新校長

金子校長の後任として大正3年4月に着任したのが岡村正巳校長である。金縁眼鏡をかけた気障っぽい男で、足が悪く杖をついて歩き、神経質であり、金筋・サーベルの判任官の姿に、教職員はもとより、生徒も馴染まず、白眼視した。哲太郎の文昌校時代の教え子で用務員をしていた李天送は、校長の命令に従わず、事毎にたて付く具合で、学校の空気は急激に冷却化した。哲太郎は、我関せずと平静を装っていたが、心中は只ならざるものがあったと思われる。岡村校長は、家庭的にも不幸な人であったようで、長女が大安溪から船を出して投身するという事件があり、殺されたとか自殺したとか、街では色々な噂が飛び交った。「志賀哲太郎傳」では、静岡県出身とあるが、台湾総督府職員録を調べた結果、福岡県出身であることが分かった。

文昌校時代の教え子郭秀卿も、よく哲太郎を慕った。台湾人教師の大半が教え子である哲太郎は、大甲公学校生え抜きの教師とあって、岡村校長にとっては煙たい存在であった。岡村校長は、哲太郎に対する教師達の厚い信任と生徒たちの思慕を嫉妬して、何とかしてそれを破壊しようとした。始めは、自分が傑出していることを宣伝したが効き目がなく、味方になる者は一人もいなかった。そこで、哲太郎の悪宣伝を始めたが、これもまた誰も相手にしなかった。それでも校長は、陰湿な方法を以て、ことごとに哲太郎に嫌がらせを行った。しかし、哲太郎に対する同僚教師たちの信頼と教え子達の思慕の情は些かも揺らぐことなく、嫉妬心に燃えた校長は、どうしても手の下しようがなくなり、日夜悩んだようである。

	明治35 (1902) 年	彰化庁彰化公学校 教諭	
	明治36 (1903) 年	彰化庁彰化尋常高等小学校教諭	
	明治37 (1904) 年	彰化庁員林公学校 教諭	
	明治42 (1909) 年	台中庁社頭公学校 教諭	
	大正 5 (1916) 年	台中庁大甲公学校 教諭	
	大正12 (1923) 年	台中州大甲公学校 訓導	
	大正15 (1926) 年	辞職	
岡村校長の経歴 (台湾総督府職員録引用)			用務員 李天送 (教え子)
			
哲太郎を慕った 教え子郭秀卿 T 9 卒	大正7年李欽水教師辞職に伴う惜別の記念撮影 (大甲老照片引用)		

金縁眼鏡と杖を使用の
岡村正巳校長
(大甲國民小學提供)



哲太郎を慕った
教え子郭秀卿
T 9 卒

大正7年李欽水教師辞職に伴う惜別の記念撮影 (大甲老照片引用)

姓名	岡村正巳
本籍	福岡
日本紀年	大正五年
西元紀年	1916
單位名稱	臺中廳大甲公學校
官職名	教諭
職稱	學校長(兼)

(月二)	(月三)	(月三)	(月三)	雇	(月六)	(月七)	(月七)	(月六)	(月三)	訓導	(月五)	學校長(兼)四	教諭	○大甲公學校	苗粟三袋天甲街
何氏	黃並	平田	志賀		劉祚	杜瑞	陳彩	郭彩	陳嘉		手塚	岡村			
睡春	傳慶	虎男	哲太郎		真慶	抱慶	妍慶	鳳慶	瑜慶		廣重	正巳			

T3大甲公學校教職員 (台灣總督府職員錄引用)



姓名	陳嘉瑜 當時25歲
本籍	臺灣 大甲庄尾
日本紀年	大正三年
西元紀年	1914
單位名稱	臺中廳大甲公學校
官職名	訓導
薪俸	月20



姓名	郭彩鳳
本籍	臺灣
日本紀年	大正三年
西元紀年	1914
單位名稱	臺中廳大甲公學校
官職名	訓導
薪俸	月18



姓名	陳妍 當時21歲
本籍	臺灣 大甲社尾
日本紀年	大正三年
西元紀年	1914
單位名稱	臺中廳大甲公學校
官職名	訓導
薪俸	月17



姓名	杜瑞抱 當時23歲
本籍	臺灣 大甲街東門
日本紀年	大正三年
西元紀年	1914
單位名稱	臺中廳大甲公學校
官職名	訓導
薪俸	月17



姓名	志賀哲太郎 當時48歲
本籍	熊本
日本紀年	大正三年
西元紀年	1914
單位名稱	臺中廳大甲公學校
官職名	雇
薪俸	月40



姓名	黃並傳 當時26歲
本籍	臺灣 大甲朝陽里
日本紀年	大正三年
西元紀年	1914
單位名稱	臺中廳大甲公學校
官職名	雇
薪俸	月13

8 任官拒否

哲太郎は、26年間、雇教員として終始した。「台湾官吏は文官服に剣を吊っているが、剣を吊っては教育は行えない。教育は威圧ではない。子どもの知能を啓発し育てるもので、役人根性を以てこれを律することは教育の道に反する」との強い信念を持っていた。一生和服で通した所以である。教師は、普通、数年で雇教員から判任官となり、文官服を着て剣を吊る。哲太郎についても、何度も正教員にしようとする動きがあったが、哲太郎は、これを固辞し続けた。任官すると台中庁の命令で大甲から転勤しなくてはならない。大甲を愛し、大甲を離れることは絶対に拒否した。教え子が師範学校を卒業して帰って来ると正教員であり、席次は哲太郎の上になる。しかし、哲太郎は平気で、酒が廻るとよく「おれは御(お)のつく雇で、台湾の御雇(おやとい)だ」と言って誇りとしていた。

また、哲太郎の履歴書(明治43年作成)では、神水義塾普通学修業、京都市オリエンタルホール英語学修業、深野達に従い法律学研究となっているが、明治法律学校での法律学専攻は記載されていない。高学歴であることを書けば、必ず任官させられることから、そのようにしたようである。哲太郎は、大甲の人々の人情に溶け込み、一生を大甲子弟の教育に捧げ、この地で一生を終える覚悟を決めていた。



台湾総督府文官制服(帝国制服要覧引用)



和服の哲太郎(大甲老照片引用)



文官服の岡村校長(大甲老照片引用)

臺灣公學校官制(明治三十一年七月抄)
 臺灣公學校ニ左ノ職員ヲ置ク
 校長
 教諭
 訓導
 一 學校長ハ各校一人判任トス辨務署長又ハ支署長ノ命ヲ承ケ校務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス
 一 學校長ハ教諭ヲシテ之ヲ策メシム
 一 教諭ハ判任トス生徒ノ教授ヲ擔任シ校長ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス
 一 訓導ハ判任官ノ待遇トス教諭ノ職務ヲ助ク

公学校官制(台湾総督府職員録引用)

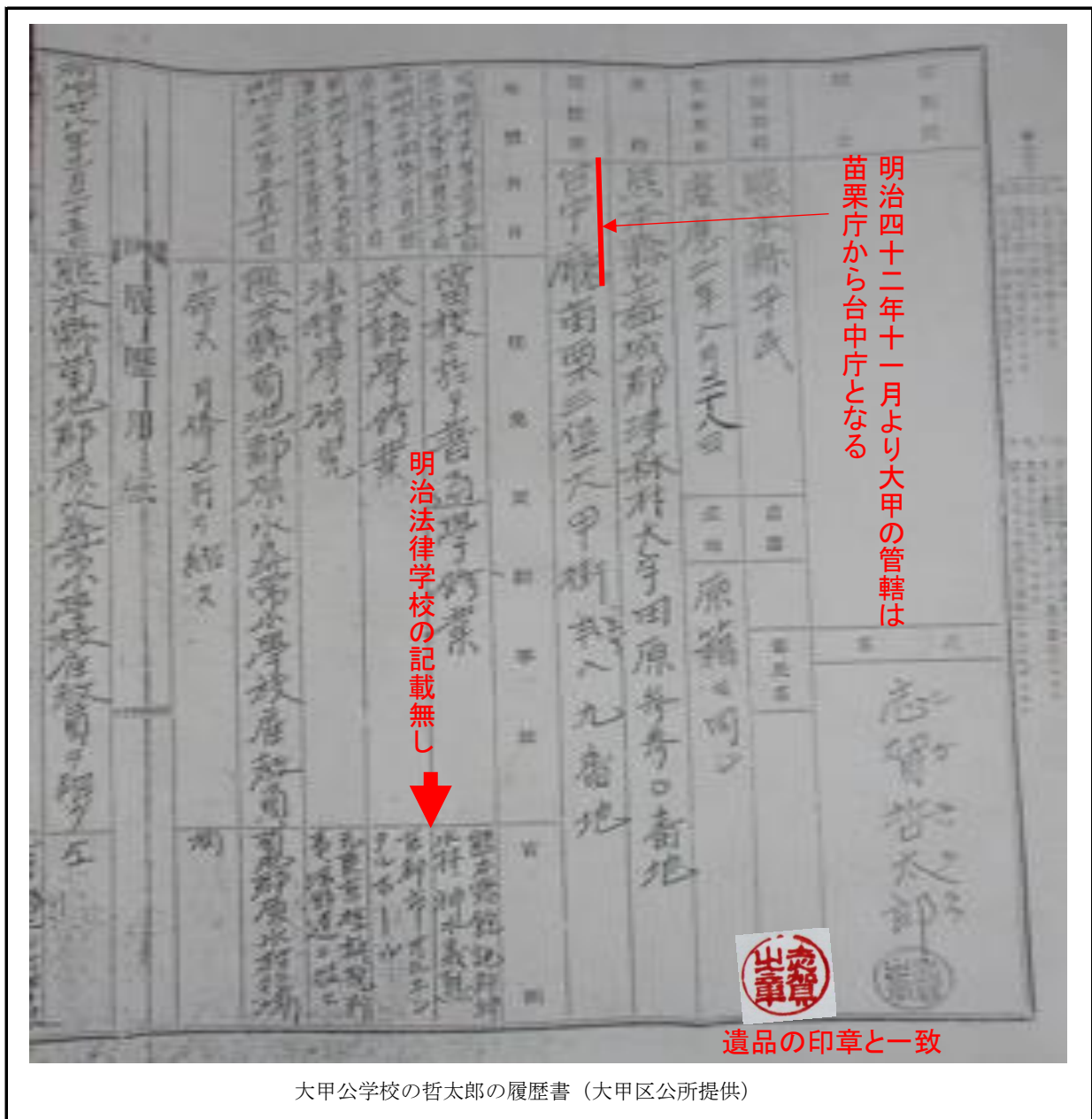
官公庁に勤める者	官吏	高等官	親任官 (高等官一等・二等)	文官服 帯 剣
			委任官 (高等官三等~九等)	
		判任官		
		官吏でない者 (雇員・傭人・嘱託など)	平服	

文官役人の階級

岡村新校長は、哲太郎を学校から排除しようと「先生は、功勞が多いから昇官させねばならない」と言って哲太郎に相談をもちかけたりしたが、「自分は大甲を離れたくないから、御好意は有り難いが、任官は御免蒙る」と断った。それでも岡村校長は執拗に毎年の異動期には、哲太郎の転勤をもくろんだ。しかし、哲太郎はこれを拒否し続けた。

金子前校長は、後年、「志賀氏は大甲の為に、一身を棄つべく、早くより覚悟を定めておられた。人生を大悟し、死生を達観し、自己の死に場所を、大甲と定めおられた。氏は任官したいとか、一校を管理して見たいとか云ふ様な希望は、当初より毛頭なかった。又氏は、渡台以来、一回も帰郷したことがなく、従って、氏には名義上、將に物質上の待遇の如きは、一切問題ではないのであった。唯々眞つ黒くなって、学校のため、地方のために働けば、それで事は足りるのであった」と述べている。

なお、志賀紀念室にある履歷書の印影は、遺族の澤田寛旨氏が保管している遺品の印章と一致した。



志賀哲太郎の履歴書

「志賀紀年室」資料抜粋

位 勲 爵 博 士		氏名	志賀哲太郎	
府県族籍	熊本縣平民	舊藩		藩氏名
生年月日	慶應2年8月28日	産地	原籍ニ同ジ	
原 籍	熊本縣上益城郡津森村大字田原330番地			
現 住 所	台中廳苗栗三堡大甲街389番地			
年号月日	任免賞罰事事故		官衛	
自明治16年3月15日 至全19年4月30日	当校ニ於テ普通學修業	熊本縣飽託郡神水村 神水義塾		
自明治24年2月2日 至全年12月20日	英語學修業	元京都市オリエンタルホール		
自明治25年8月12日 至全27年3月30日	法律學研究	元東京控訴院判事深野達二従ヒ		
明治27年5月11日	熊本縣菊池郡原水尋常小學校雇教員 ヲ命ス 月俸7円ヲ給ス	菊池郡原水村役場		
明治28年3月25日	熊本縣菊池郡原水尋常小學校雇教員 ヲ解ク	全		
自明治32年2月23日 至全年12月20日	臺灣語研究	元台中州大甲小學校 雇陳瑚に隨ヒ		
明治32年5月19日	臺中縣大甲公學校雇教員ヲ命ス 月俸金15円支給	台中縣		
明治32年12月22日	月俸金25円支給	全		
明治32年12月23日	事務勉勵ニ付為慰勞金10円を賞与ス	全		
明治33年6月30日	月俸金25円支給	全		
明治33年12月25日	事務勉勵ニ付為慰勞金10円を賞与ス	全		
明治34年7月3日	臨時講習ヲ命ス	全		
明治34年8月17日	授業法、国語、心理、音楽 右者本縣所定ノ教員講習規定ニ依リ 5週間頭書ノ科目ヲ講習セシコトヲ證ス	全		
明治34年12月25日	事務勉勵ニ付為慰勞金23円を賞与ス	台湾總督府		
明治35年3月31日	月俸金30円支給	全		
明治35年12月22日	職務格別勉勵ニ付為慰勞金25円を賞与ス	全		
明治36年12月22日	職務格別勉勵ニ付為慰勞金30円を賞与ス	全		
明治37年12月22日	職務格別勉勵ニ付慰勞トシテ金30円を賞与ス	全		
明治38年7月27日	臨時台湾戸口調査委員ヲ命ス	全		
明治38年9月15日	苗栗廳第33監督区第7調査区擔当を命ス	全		
明治38年12月22日	職務格別勉勵ニ付金30円を賞与ス	全		
明治39年3月31日	月俸金35円ヲ支給	全		
明治39年12月22日	職務格別勉勵ニ付金22円を賞与ス	全		
明治40年12月23日	職務格別勉勵ニ付金18円を賞与ス	全		

年号月日	任免賞罰事事故	官衛
明治41年12月21日	職務格別勲励ニ付金30円を賞与ス	苗栗庁
明治42年12月21日	職務格別勲励ニ付金35円を賞与ス	台湾總督府
明治43年3月31日	月俸金38円ヲ支給	台中庁
明治43年12月21日	職務格別勲励ニ付金38円を賞与ス	台湾總督府
明治44年12月21日	職務格別勲励ニ付金38円を賞与ス	台中庁
大正元年9月30日	月俸金40円ヲ支給	全
大正元年12月21日	職務格別勲励ニ付金60円を賞与ス	全
大正2年12月21日	職務格別勲励ニ付金45円を賞与ス	全
大正3年6月17日	15年以上本島教員ニ従事シ勤勞不勩ニ付茲ニ第19回始政紀念日ニ当リ徽章1個及酒肴料3円を授与ス	台湾總督府
大正3年12月21日	職務格別勲励ニ付金50円を賞与ス	台中庁
大正4年6月17日	台湾總督府ニ於テ15年以上勤続公務ニ従事シ其勞不勩ニ付茲ニ第20回始政紀念日ニ当リ木杯1個ヲ授与ス	全
大正4年8月10日	臨時台湾戸口調査委員ヲ命ス	全
大正4年8月10日	台中廳第53監督区第5調査区擔當を命ス	台湾總督府
大正4年9月30日	月俸金43円ヲ支給	台中庁
大正4年12月10日	臨時戸口調査ニ関シ勤勞不勩ニ付慰勞トシテ金3円給ス	台湾總督府
大正4年12月21日	事務格別勲励ニ付金55円を賞与ス	台中庁
大正5年12月21日	事務格別勲励ニ付金55円を賞与ス	全
大正6年12月21日	事務格別勲励ニ付金60円を賞与ス	全
大正7年9月30日	月俸金45円ヲ給ス	全
大正7年12月21日	事務格別勲励ニ付金60円を賞与ス	全
大正8年3月31日	月俸金47円ヲ給ス	全
大正8年9月30日	月俸金50円ヲ給ス	全
大正8年12月21日	事務格別勲励ニ付金80円を賞与ス	全
大正9年8月17日	月俸金85円ヲ給ス但シ8月分ヨリ支給	全
大正9年9月30日	月俸金90円ヲ給ス	全
大正9年12月21日	事務格別勲励ニ付金130円を賞与ス	全
大正10年12月21日	事務格別勲励ニ付金150円を賞与ス	全
大正11年4月1日	辞令書ヲ用ヘシテ大甲公學校教員心得ヲ命ゼラレシ月俸金90円ヲ給セラル	全
大正11年9月30日	月俸金92円ヲ給ス	臺中州
大正11年12月21日	事務格別勲励ニ付金150円を賞与ス	臺中州
大正12年12月15日	事務格別勲励ニ付金140円を賞与ス	臺中州

9 始政記念表彰等

哲太郎は、金子校長が辞職した大正3(1914)年5月に勤続15年を迎え、台湾総督府から、同年6月17日の第19回始政記念日（台湾統治記念日）に徽章1個及び酒肴料3円を、また、翌年の第20回始政記念日に木杯を、それぞれ授与されている。このときの祝賀会の記録はないが、おそらく教え子教師黄並傳、陳嘉瑜、陳焯らが中心となって開催したと思われる。

哲太郎は、大正8年8月22日にも、金子校長や米村嘉平とともに、大日本帝国政府より褒賞を受けている。これは「業務に精励し衆民の模範たるべき者」に授与される黄綬褒章であったと思われる。遺書の「上御一人（天皇のこと）に相濟まず」の言葉は、この褒賞受賞のことを思って記したものと推測する。

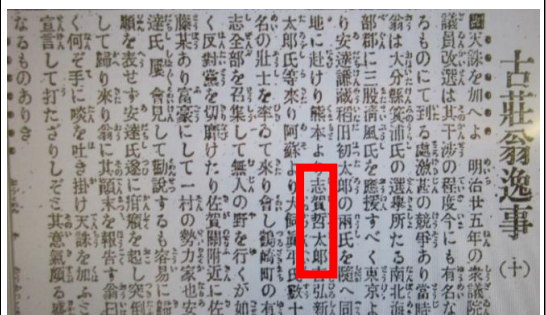




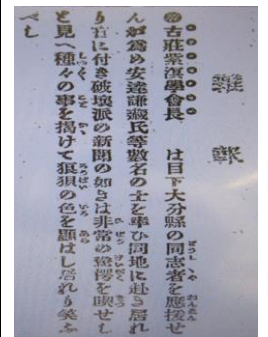


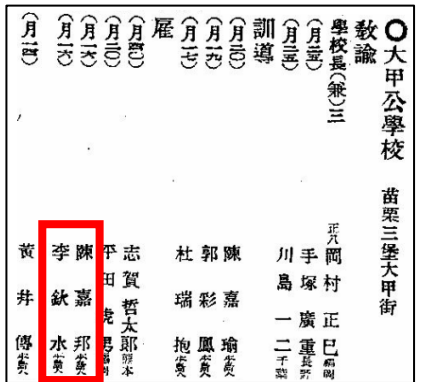

 <p>哲太郎 行賞：48歳、49歳 褒賞：53歳</p>	 <p>始政記念日の絵葉書</p>	 <p>哲太郎の履歴書 (大甲区公所提供)</p>
 <p>大正8年に完成した台湾総督府庁舎 (臺灣写真帖引用)</p>	 <p>第20回始政記念日 時の総督 第6代 安東貞美</p>	
 <p>台湾銀行券1円札と木杯 (参考例)</p>		
<p>十五年以上勤績者行賞 大正三年六月一日</p> <p>教諭兼校長沼市郎彦・台南庁台南第二公学校訓導郭君盤・新竹庁鶏隆公学校訓導 呉秉哲・台中庁大甲公学校雇志賀哲太郎・台中庁埤雅公学校雇張春亭・阿緱庁龍</p> <p>国史館臺灣文献館データ引用</p>		<p>台字(徽)章</p> 
<p>褒賞 大正八年八月二十二日</p> <p>福、黄大水、楊忠猷、陳荐、王開廷、楊景文、劉玉輝、王萬生、志賀哲太郎、落合末吉、米村嘉平、四宮義親、金子政吉、安田熾郎、平松儀右衛門、木藤駒次、綠川鐵次郎、</p> <p>国史館臺灣文献館データ引用</p>		<p>旧黄綬褒章</p> 

10 政界の闘士

哲太郎の経歴については、同郷人、台湾人は勿論、学校内でさえ知られていなかった。大正4(1915)年6月、同郷出身の米村嘉平が熊本から届いた新聞を読んでいたが、彼は腰を抜かさんばかりに驚いた。哲太郎のことが書かれていたからだ。古荘嘉門の死を報じ、安達謙蔵らとともに選挙を戦った記事である。米村は、その新聞を友人は勿論、学校まで持ち込み、見せて歩いた。志賀哲太郎が、松方内閣の選挙干渉に屈せず、今を時めく安達謙蔵とともに全国各地を遊説して廻ったとの記事は、読む人達に、果たして同一人であるかという疑念を抱かせた。教え子達もその新聞を読み、代表を選んで哲太郎の宿舎を訪ね、「記事にあるのは先生ですか」と詰め寄ったら、哲太郎は「そうだ」と頷いた。偉いはずだ、他の先生と違っているのも当然だと皆が納得し、学校内は勿論、街の噂にもなった。

このとき、哲太郎の宿舎を訪れた教え子達は、宿舎の近くの大甲信用組合の者か、公学校の教師と思われる。この年の信用組合には、許天奎、吳淮水、陳煌、林麒麟、黄清波らがあり、学校の教師には、陳嘉邦、李欽水らが勤務していた。彼等は、のちに民族運動の中心的存在になっていることから、この中の何人かが代表として訪問したと思われる。



米村が持参した記事は、大正4年5月30日付けの九州日日新聞で、古荘翁逸事(十)の見出しで、第2回衆議院議員選挙で古荘嘉門が安達謙蔵らを従え、大分県の同志の応援に行った際、熊本から哲太郎も応援に赴いたというものである。この選挙は、松方内閣が全国の警察に選挙干渉を指示した中で行われたもので、哲太郎が藩閥政治と相対した政界の闘士であったということに皆驚いたのである。それまで語る事のなかった過去の履歴が知られることとなり、それが教え子達を民族運動に向かわせる大きな要因となったことは確かである。また、明治25年2月4日付け九州日日新聞の「雑報」は、当時、選挙応援に行ったときに、哲太郎が書いた記事と思われる。

 <p>古荘翁逸事(十) 米村嘉平が持参した哲太郎に関する記事 (T4. 5. 30九州日日新聞)</p>	 <p>T4 哲太郎 当時49歳</p>	 <p>T4 大甲信用組合 黄清波 M40卒24歳 大甲日新会</p>	 <p>T4 大甲信用組合 許天奎 M38卒32歳 大甲漢学会</p>	 <p>T4 大甲信用組合 陳煌 M42卒24歳 大甲日新会 大甲読書会</p>	
 <p>古荘翁逸事(十) 哲太郎作成のもの と思われる記事 M25. 2. 4九州日日新聞</p>	 <p>T4 大甲公学校 陳嘉邦 M38卒24歳 大甲漢学会 大甲日新会</p>	 <p>T4 大甲公学校 李欽水 M42卒20歳 大甲日新会</p>	 <p>○大甲公学校 苗栗三堡大甲街 教諭 孫九岡 正巳 校長(兼) 手塚 重長 訓導 川島 一 杜 郭 陳 瑞 彩 嘉 鳳 喻 杜 郭 陳 瑞 彩 嘉 鳳 喻 志 賀 哲 太 郎 平 田 欽 男 李 欽 水 陳 嘉 邦 黄 井 傳 典</p> <p>T4 台湾総督府職員録引用</p>		 <p>T4 大甲信用組合 吳淮水 M43卒18歳 大甲漢学会 大甲日新会</p>

11 分教場兼任

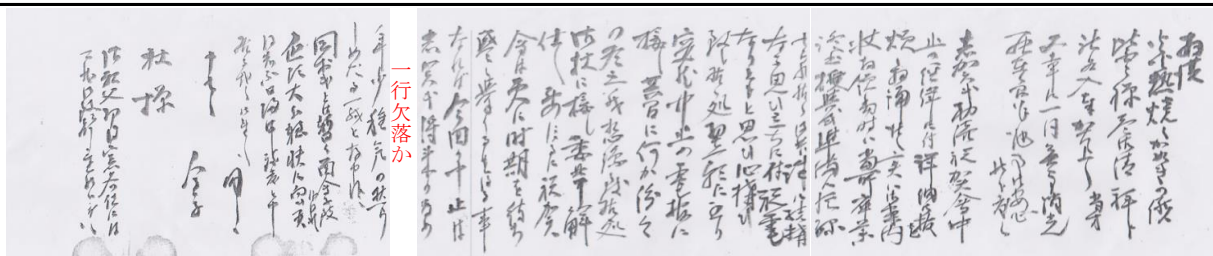
日本人小学校の台中尋常高等小学校大甲分教場は、金子校長罷免により、台湾人の目に見えざる反抗にあった。「志賀哲太郎傳」では日本人小学校は三堡の公学校と併設とあるが、その事実はない。日本人小学校は、明治44年9月4日に台中尋常高等小学校大甲分教場として開校し、大正3年葫蘆墩（豊原）尋常高等小学校大甲分教場となり、大正5年4月1日、独立して大甲尋常小学校となる。大正7年に鎮瀾宮の東側に新校舎が落成して移転する。

大正7(1918)年、台湾人父兄の希望により、文昌祠は大甲公学校分教場として再出発することとなった。三堡校の哲太郎は兼任、台北国語師範卒の黄並傳が専任となった。黄並傳は文昌校時代の教え子であるから、哲太郎に父のように仕え、気心もよく合い、剛直、誠実な点はよく似ていた。黄は、1年生から4年生までの生徒を哲太郎と一緒に教えた。哲太郎を父のように尊敬し、校長を味噌くそのように罵倒しても、哲太郎に対しては慈父の礼を以てした。

<p>○大甲尋常小學校 苗栗三堡大甲街 教諭(月三) 學校長(兼) 長島 專 志 安 藏</p>	<p>○大甲尋常小學校 苗栗三堡大甲街 教諭(月三) 學校長(兼) 打方 新 治 雄 弁 三浦 ミサチ 照 本 (月三)</p>	<p>○葫蘆墩尋常高等小學校大甲分教場 苗栗三堡 大甲街 教諭 (月三) 淺谷 時 光 覺 島 (月三) 三浦 ミサチ 照 本</p>	<p>○臺中尋常高等小學校 藍興堡 臺中街 教諭 學校長(兼)五 七 吉田 兼造 福 弁 (月三) (月三) 岸 榮彌 愛 知 (月三) (月三) 田村 勉 香 川 (月三) 大甲派 遺教 授 伊藤 實一 熊 本 (月三) 擔任 小池 秀勝 長 野 (月三) 遺教 授 岸上 トク 覺 島 (月三) 松田 幾 千 代 佐 賀 (日給也)</p> <p>玉 井 郷 方 巖 手 木村 源 次 郎 巖 手 打方 新 治 雄 弁 岩武 清 司 大 分 岸上 金 次 郎 覺 島 淺谷 時 光 覺 島</p>																					
<p>大正7年台湾總督府職員録</p>	<p>大正5年台湾總督府職員録引用</p>	<p>大正3年台湾總督府職員録引用</p>	<p>明治45年台湾總督府職員録引用</p>																					
 <p>大正7年に大甲公学校分教場となった文昌祠 昭和初期撮影 (王澤佳氏提供)</p>				 <p>文教場専任教師 黄並傳 当時31歳 (大甲鎮誌引用)</p>	 <p>哲太郎 当時52歳</p>																			
<table border="1"> <tr><td>明治42 (1909) 年</td><td>苗栗庁大甲公学校</td><td>雇</td></tr> <tr><td>明治43 (1910) 年</td><td>台中庁大甲公学校</td><td>雇</td></tr> <tr><td>明治44 (1911) 年</td><td>台中庁大安区</td><td>書記</td></tr> <tr><td>大正4 (1913) 年</td><td>台中庁大甲公学校</td><td>雇</td></tr> <tr><td>大正11 (1922) 年</td><td>台中州大甲公学校</td><td>教員心得</td></tr> <tr><td>大正13 (1924) 年</td><td>台中州大甲公学校</td><td>準訓導</td></tr> <tr><td>大正14 (1925) 年</td><td>台中州大甲公学校</td><td>準訓導</td></tr> </table>	明治42 (1909) 年	苗栗庁大甲公学校	雇	明治43 (1910) 年	台中庁大甲公学校	雇	明治44 (1911) 年	台中庁大安区	書記	大正4 (1913) 年	台中庁大甲公学校	雇	大正11 (1922) 年	台中州大甲公学校	教員心得	大正13 (1924) 年	台中州大甲公学校	準訓導	大正14 (1925) 年	台中州大甲公学校	準訓導	<p>黄並傳の總督府職員歴 (台湾總督府職員録引用)</p>		
明治42 (1909) 年	苗栗庁大甲公学校	雇																						
明治43 (1910) 年	台中庁大甲公学校	雇																						
明治44 (1911) 年	台中庁大安区	書記																						
大正4 (1913) 年	台中庁大甲公学校	雇																						
大正11 (1922) 年	台中州大甲公学校	教員心得																						
大正13 (1924) 年	台中州大甲公学校	準訓導																						
大正14 (1925) 年	台中州大甲公学校	準訓導																						



勤続20周年祝賀記念 大正8（1919）年8月10日 撮影（大甲村庄史引用）



金子校長から杜香國宛に出した二十周年祝賀会中止に関する手紙（張慶宗氏提供）

直訳
 炎熱焼くが如きの儀候
 皆々様益御清祥と
 被為入奉賀上候 当方
 又幸に一同無事消光
 罷在候間乍他事御安心
 被下度候
 志賀氏勤続祝賀会中
 止の経緯に付詳細御報せ
 煩し拝誦仕候実は御案内
 状拝領当時は当所卒業
 詔書授與式準備に忙碌
 せられ居候得共誠に結構
 なる思ひ立ちに付祝電
 なりともと思ひ心構ひ
 致し居候処翌朝に至り
 突然中止の電報に
 接し其間に何か粉々の
 の有之哉想像致居候処
 御状に接し委曲了解
 仕候 要するに祝賀
 会は更に時期を待ち
 盛に挙ぐるを得る事
 なれば今回の中止は
 志賀氏将来の為め
 年少稚気の然ら
 しめたる一義と存申候
 岡村氏とは暫く面会不致
 近頃大分軽快に向ひ候
 得者不日帰申致度と申
 居る哉と御座候
 忽々
 十七日 金子
 杜様
 御叔父御同窓各位には
 可然御報聲置願ひ度候

（丸山伸治氏訳）

現代語訳
 炎熱で焼けるような暑さです
 皆々様ますますお元気で暮
 らしの事とお喜び申し上げます。
 私の方も又幸にも無事毎日
 を過ごしておりますのでご安
 心ください。
 志賀氏勤続祝賀会中止の経
 緯について詳細のお知らせは
 煩わしい問題と拝読しました。
 実は御案内状拝領当時、私は
 当所卒業詔書授与式の準備に
 忙しくしていました。
 今回の事は誠に結構なる企画
 と思いついておりましたところ
 翌朝になって突然中止の電報
 に接し、その間に何かあった
 んだろうと想像しました。
 あなたの手紙に接し詳しいこ
 とがわかりました。
 祝賀会はしばらく時期を待つ
 て盛大に開催すれば今回の中
 止は志賀氏の将来を考え
 ・・・一行欠落か
 ・・・岡村校長の年少者らしい気持
 ちゆえのなせるわざとも思っ
 ます。岡村氏とは最近会って
 おりませんが、近頃病状はか
 なり軽快に向かっているとい
 うことですから、近く帰りたい
 と申しているの聞き及びま
 す。
 忽々

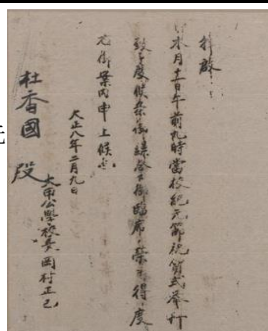


宛先人 杜香國
 当時25歳



差出人 金子政吉
 当時48歳

岡村校長から杜香國宛
 に出した大正8年の紀元
 節祝賀式挙げる案内状
 （杜香國文書引用）







哲太郎 当時53歳

13 民族運動

蔣渭水（しょういすい）が提唱し、林獻堂（りんけんどう）が先頭になって、青年学生を結集した台湾文化協会は、大正10（1921）年10月17日、台北市稻埕の天主教静修女子中学校講堂において発足した。同会の本来の目的は、台湾人の文化啓蒙であった。同会は、台湾人の民族意識向上のため、大正12（1923）年に『台湾民報』を創刊し、林獻堂が会長に就任した。大正13（1924）年から3年間にわたり、台中市霧峰の林家菜園を開放して夏季学校を開き、各種科目の講習と討論会を開催した。これには、多くの資産家層も参集した。大正14年7月の夏季学校では、コロンビア大学から帰った哲太郎の教え子、陳焯が講師を務めた。

台中と大甲は近かったので、林獻堂らの運動はいち早く大甲街に流れ込んできた。大甲の青年有志は「台湾民報」をむさぼり読んで次々に運動に参加し、林獻堂の提唱する「六三法撤廃運動」は「台湾議會設置請願運動」へと発展拡大していった。

大甲公学校においても、生徒の保護者、卒業生、そして台湾人教師の大部分が、文化協会に入り、文昌祠や鎮瀾宮で民族解放を叫び、婦女子に至るまで集会に押しかけ、文化の街大甲は大きく揺れ動いた。大正10年には、庄尾の教え子で司法書士の陳嘉邦が大甲漢学会を組織し、文昌祠で演説を繰り返した。陳嘉邦は昭和4年に官憲に摘発され、司法書士の免許が剥奪された。また、大正12年12月23日には、鎮瀾宮で活動していた杜清、杜香國（教え子）親子が、治安警察法違反で逮捕された。哲太郎はこの情勢を静観していたが、運動は広がるばかりで、総督府の一教員として、その狭間で悩んだ。

		
<p>民族運動指導者 林獻堂 当時40歳</p>	<p>蔣渭水 当時31歳</p>	<p>台湾文化協会発足の静修女子中学校 (台湾古建築図解辞典引用)</p>
<p>明治43（1910）年</p>	<p>台中庁霧峰区区长</p>	
<p>明治44（1911）年</p>	<p>台中庁霧峰区区长</p>	
<p>明治45（1912）年</p>	<p>台中庁霧峰区区长</p>	
<p>大正 9（1920）年</p>	<p>台中庁庶務課</p>	
<p>同上</p>	<p>台中州協議会員</p>	
<p>大正10（1921）年</p>	<p>総督府評議員</p>	
<p>大正11（1922）年</p>	<p>総督府評議員</p>	
<p>林獻堂の総督府での経歴（総督府職員録）</p>		<p>台湾文化協会第一回理事会（大正10年） 日本統治下の台湾民族運動史引用</p>
		
<p>懊悩の日々 哲太郎 58歳</p>	<p>夏季学校講師 陳焯（教え子） 当時32歳</p>	



夏季学校が開催された林家菜園（台中市）H29.11撮影



台湾民報



台湾議会請願団（大正13年台中州庁）
日本統治下の台湾民族運動史引用



文化協会公演団 大正14年6月撮影
日本統治下の台湾民族運動史引用



検挙
陳嘉邦
当時30歳
公学校M38卒
台北師範T4卒
司法書士



逮捕
杜清
当時54歳
杜香國の父
大甲帽蓆購買
販売組合副組合長



逮捕
杜香國
当時29歳
公学校M39卒
台北師範M45卒
台湾証券株式会社常務

法律第六十三號（官報 明治二十九年三月三十一日）

第一條 臺灣總督ハ其ノ管轄区域内ニ法律ノ效力ヲ有スル命令ヲ發スルコトヲ得

第二條 前條ノ命令ハ臺灣總督府評議會ノ議決ヲ取り拓殖務大臣ヲ經テ勅裁ヲ請フヘシ

臺灣總督府評議會ノ組織ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第三條 臨時緊急ヲ要スル場合ニ於テ臺灣總督ハ前條第一項ノ手續ヲ經スシテ直ニ第一條ノ命令ヲ發スルコトヲ得

第四條 前條ニ依リ發シタル命令ハ發布後直ニ勅裁ヲ請ヒ且之ヲ臺灣總督府評議會ニ報告スヘシ

勅裁ヲ得サルトキハ總督ハ直ニ其ノ命令ヲ將來ニ向テ效力ナキコトヲ公布スヘシ

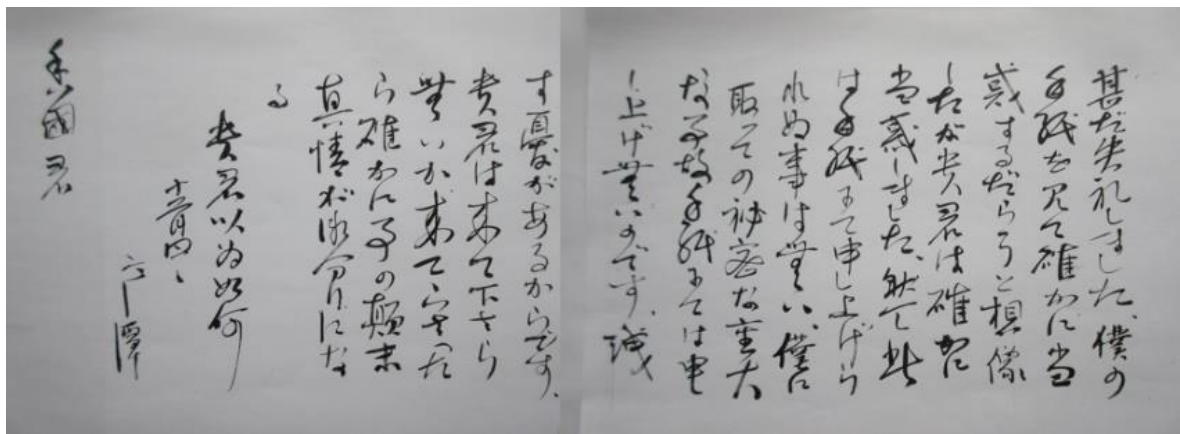
第五條 現行ノ法律又ハ將來發布スル法律ニシテ其ノ全部又ハ一部ヲ臺灣ニ施行スルヲ要スルモノハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第六條 此ノ法律ハ施行ノ日ヨリ滿三年ヲ經タルトキハ其ノ效力ヲ失フモノトス

六三法（明治29年法律第63号）

14 大甲の民族運動組織

台湾文化協会の大甲における組織「大甲街文化協会」は、哲太郎の教え子達が組織する大甲漢学会が中心であった。哲太郎の死後、大甲日新会、大甲読書会が組織され、活発な民族運動が起こる。昭和2年、台湾文化協会が分裂すると、大甲街文化協会は、民衆党大甲支部となり、哲太郎の民族平等、相互尊重の精神を受け継いだ教え子達は、大甲の人達に民族運動への参加を呼びかけた。教え子の陳焯は「自由・教育」を訴え、呉淮水は鐵砧山麓に志賀の名を刻んだ(志賀を形どった)「石頭人」や「江山萬里碑」を建立し、民衆党精神の指標とした。活動は警察の監視下で行われていたため、身に危険が及ぶ恐れがあったことが杜香國宛の〇〇潭の手紙からうかがえる。手紙は12月4日とあり、杜香國の逮捕が大正12年12月23日であることから、大正12年12月4日の手紙と推測する。また、杜香國宛の各種書簡から教え子活動家達の連帯の状況がわかる。



杜香國宛の〇〇潭の手紙 (張慶宗氏提供)

香國君

甚だ失礼しました。僕の手紙を見て確かに当惑するだろうと想像しましたがあなたは確かに当惑しました。然し私は手紙では申し上げられないのです。私に取って絶対内緒にしないてはならない重大な悪い出来事で手紙では申し上げられないのです。
(警察に) 摘発されるおそれがあるからです。
 あなたが来てくれませんか来て下さったら正確な事の顛末実情が御分りになる
 あなたはいかがなさいますか
 十二月四日
 〇〇潭

現代語訳

甚だ失礼しました。僕の手紙を見て確かに当惑するだろうと想像しましたがあなたは確かに当惑しました。然し私は手紙では申し上げられないのです。私に取って絶対内緒にしないてはならない重大な悪い出来事で手紙では申し上げられないのです。
(警察に) 摘発されるおそれがあるからです。
 あなたが来てくれませんか来て下さったら正確な事の顛末実情が御分りになる
 あなたはいかがなさいますか
 十二月四日
 〇〇潭

香國君

甚だ失礼しました。僕の手紙を見て確かに当惑するだろうと想像しましたが貴君は確かに当惑しました。然し此れは手紙にて申し上げられぬ事は無い僕に取っての秘密な重大な事故手紙にては申し上げ無いのです。洩す憂いがあるからです。
 貴君は来て下さら無いか来て下さったら確かに事の顛末真情が御分りになる
 貴君以為如何
 十二月四日
 〇〇潭



直訳 (丸山伸治氏)

台湾文化協會







大甲街文化協會




昭和2年分裂

大甲漢学会 大正10年(1921)10月設立 台北國語師範學校卒業生

 陳嘉邦 30歲 公學校M38卒 台北師範T4卒	 杜香國 27歲 公學校M39卒 台北師範M45卒	 陳烜 28歲 公學校M42卒 台北師範T2卒	 許天奎 38歲 公學校M38卒 台北師範M42卒	 李欽水 26歲 公學校M42卒 台北師範T4卒	 吳淮水 24歲 公學校M43卒 台北師範T4卒
--	---	---	--	--	--





大甲日新會 大正15年(1926)1月設立 活動拠点鎮瀾宮 30余人

 杜清 57歲 發起人	 杜香國 32歲 公學校M39卒 台北師範M45卒	 陳烜 33歲 公學校M42卒 台北師範T2卒	 李欽水 31歲 公學校M42卒 台北師範T4卒	 吳淮水 29歲 公學校M43卒 台北師範T4卒	 郭戊己 獸醫師
--	---	---	---	--	---



 陳煌 35歲 公學校M42卒	 郭木榮 28歲 大東信託(株)	 陳嘉邦 35歲 公學校M38卒 台北師範T4卒	 黃清波 35歲 公學校M40卒	 王錐 28歲 公學校M44卒	
---	--	---	---	---	--

大甲讀書會 昭和2年(1927)7月設立 活動拠点鎮瀾宮北廂 40余人

 吳墩禮 22歲 公學校T8卒	 柯天來 新報記者	 張丁貴 私塾教師	 王龍 大甲里長S4卒	 梁財 大甲鎮役場	 李欽水 32歲 公學校M42卒
--	--	--	---	--	---

 陳煌 36歲 公學校M42卒	 杜香國 33歲 公學校M39卒	 陳烜 34歲 公學校M42卒	 陳嘉邦36歲 公學校M38卒	
--	---	--	---	---

民衆党大甲支部 昭和2年8月15日設立 活動拠点文昌祠

 王錐 29歲 公學校M44卒	 張其來 28歲 公學校T2卒	 杜香國 33歲 公學校M39卒	 吳淮水 30歲 公學校M43卒	 志賀の名を刻んだ石頭人建立
--	--	---	--	--

鐵砧山に江山萬里碑を建立 (大甲区公所提供)

志賀の名を刻んだ石頭人建立

15 教職解雇

大正13(1924)年のある日、大安出身の大甲公学校高等科学生が、故意に日本人教師を怒らせた上に、言い争いとなった。教師は激怒し、岡村正巳校長に直訴。学校側は、この学生を退学処分にするため会議を開いた。このことを知った生徒の親は、哲太郎に救いを求めた。哲太郎は、直ぐ校長のところへ行き、「台湾では、学生を募集するのも容易ではないのに、何故、即座に生徒を退学処分にするのか」と処分の撤回を頼み込む。校長は、哲太郎の意見を聞き入れないばかりか、「教師の中には、学校には優秀な教員の存在こそ重要であるのに、正式な教員でない者がいては、学生は将来、私達が教育を重視していなかったと悟るだろう」と言って、哲太郎の意見を退けた。校長は、最後に「先生には、学校農園の管理をしてもらう」と教員以外の職につくことを命じたのである。哲太郎にとって教職の道を断たれることは、死を意味していた。(李燕山の述懐)



退学処分会議が開かれた大甲公学校教職員室 (大甲國民小學提供)



▲ 大甲公学校の農園で作業の学生
(大甲國民小學提供)



哲太郎
当時59歳



公学校3年生
李燕山 当時10歳



三堡校の花壇と作業倉庫 撮影時期不明
(大甲國民小學提供) ▶

姓名 池田壯太郎	姓名 政所重三郎		姓名 常吉徳壽
本籍 福岡	本籍 北海道		本籍
日本紀年 大正十三年	日本紀年 大正十三年	内務部長 本山人文平42歳	日本紀年 大正十三年
西元紀年 1924	西元紀年 1924		西元紀年 1924
單位名稱 臺中州大甲郡役所	單位名稱 臺中州内務部教育課		官職名 臺中州委員長
職稱 郡守	職稱 課長		兼任職務 知事



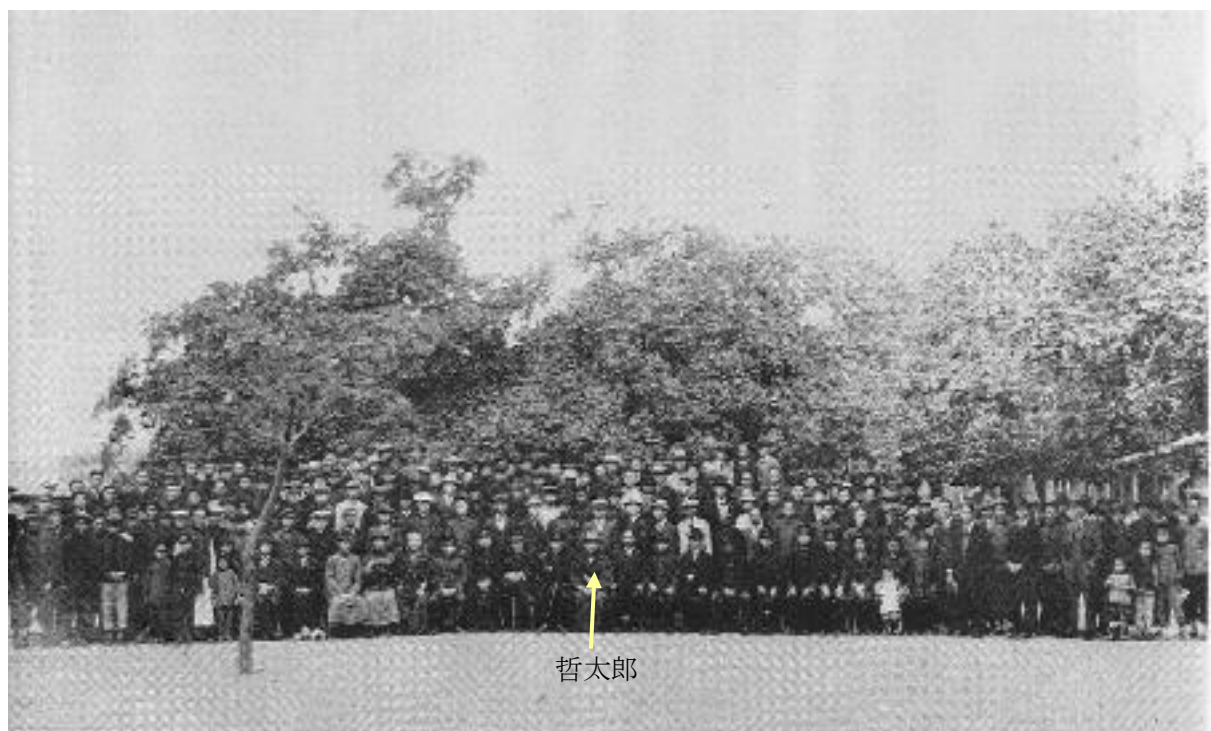
大甲公学校航空写真（大甲区公所提供）



大甲街長
李進興 48歳



台湾帽蓆同業
組合連合会長
杜清 55歳



勤続25周年祝賀会（大正13年12月21日） 大甲老照片引用 哲太郎59歳

17 自決

大正13年（1924）12月29日、大甲公学校は、冬休み前の終業日であった。哲太郎はいつものように午前4時に起き、羽織袴の正装で、ソデに「出掛けてくる」と云って、遊泳池（大正13年7月7日完成）に向かった。そして遊泳池の堤に立ち、履物をそろえ、およそ9キログラムの大石を身体にくくりつけて池に入り、命を絶ったのである。

早朝、池の管理人が遺体を発見して学校へ連絡。登校した先生達は驚愕、生徒達もあちこちにかたまり、号泣する者、嗚咽する者と大騒ぎとなった。その噂は街中に拡がり、哲太郎を知る者は直ぐ学校へ駆け付けた。

遺体は遊泳池から宿舎に移されたが、ソデの悲嘆は見るに忍びないものがあった。台湾人教師や生徒は、学校に居残って終日哲太郎の死を悼んだ。

教え子の李燕山は、哲太郎が亡くなった当時、公学校の三年生で、手記に「當日在水源池的遊泳池發見志賀先生的遺骸。在他日式袴的結帶縛著十五公斤的石頭自殺。此日志賀先生穿盛裝、紋付袴出家後行方不明」（当日水源地のプールで、志賀先生の遺体が発見された。袴の帯で、約9キログラム（※1公斤=600g）の石を身体に縛り、入水自殺をされた。先生は紋付袴の盛装で、家を出た後、行方不明になっていた）と書いている。

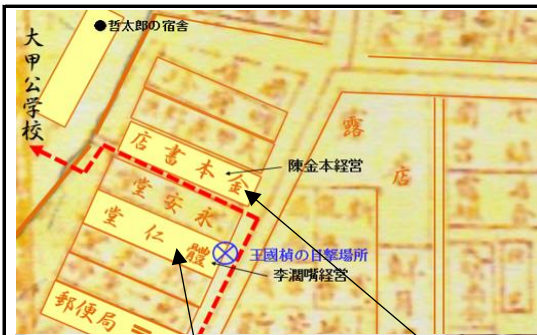
卒業生の王國楨は、「私は鎮蘭宮前で薬店「體仁堂」を経営している叔父の李潤嘴（りかつし）宅に帰省していて、その日は月曜日で、朝、公学校の李天送、本屋の陳金本らが志賀先生の遺体をおかついで、大甲街に戻ってきたところでした。街民は震撼し、先生の死の報は、またたくまに街中をかけめぐりました」と述懐している。

現在、自決場所は、水源地の地名は残っているものの、ビルが建ち当時の面影はない。また、王國楨の叔父・李潤嘴の薬店「體仁堂」は眼鏡店となっているが、建物は当時のままである。

	<p>大正10年頃の遊泳池一带 「大甲老照片專輯二」引用</p>  <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="815 1489 997 1713">  <p>公学校3年生 李燕山当時10歳</p> </div> <div data-bbox="997 1489 1401 1713">  <p>哲太郎 当時59歳</p> </div> </div>		
 <p>自決の遊泳池 大甲村庄史引用</p>	 <p>台北師範学生 王國楨 当時18歳</p>	 <p>體仁堂経営 李潤嘴 (李澄清氏提供)</p>	 <p>遺体をおかついだ 公学校用務員 李天送</p>

大甲の歴史家張蔣明氏も、「媽祖廟前で本屋を経営している陳金本と大甲公学校の用務員の李天送が、志賀先生を背負って大甲街に帰って来た」と述べている。

また、翌々日の12月31日付台湾日日新報は「今回の行政整理に行末を悲観して信望厚き老教育家池に投身自殺す」と題して「久しく教育の任にあり、曾ては25年勤続の良教員として、その筋から表彰されていた身も、年の暮れに押詰り、人は皆新しき歳を迎へる準備に忙しい28日の夜も更けてから、池に身を投げて死んだ教育家があった。それは大甲公学校の教員心得志賀哲太郎(61)である。同氏は、かねてより頗る清貧精励の人で、稀に見る教育家として、生徒の父兄からも常に信頼されていた。それで若しも、父兄等の家庭が貧しい場合には、自分から金を出して与える等の感ずべき事は数々あったが、同氏には元来妻女もなく、子供もなく、平常は宴に暢氣であったが、年瀬になって自分の将来を考へて、時折同僚に対し、悲観した事を話していたが、最近、行政整理の噂があり、自分も行政整理で解雇されるのではないかと悲観の様子で、幾分精神に異状を来していたが、28日夜半ソット宿舎を抜け出し、大甲街の町外れの驛街の池に行つて、ザブンとばかり、身を投げて自殺を遂げたは気の毒である。29日の朝、附近を通行した本島人が、死骸を發見し、大騒ぎとなり、大甲郡警察課に届け出たが、既に時間も経つていたので、係官が現場に赴いた時は、既に硬直がきてたそうである。(30日臺中電話)」と掲載している。



自決の游泳池 (1953年撮影) 大甲老照片引用



體仁堂跡 (現「金瑞美」)
H29.11撮影

大正13年12月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

自決(月曜日)



自決跡H30.1撮影(河本有紀氏提供)

宿舎と抜け出し大甲街の...
大甲公学校の教員心得志賀哲太郎(61)である。同氏は、かねてより頗る清貧精励の人で、稀に見る教育家として、生徒の父兄からも常に信頼されていた。それで若しも、父兄等の家庭が貧しい場合には、自分から金を出して与える等の感ずべき事は数々あったが、同氏には元来妻女もなく、子供もなく、平常は宴に暢氣であったが、年瀬になって自分の将来を考へて、時折同僚に対し、悲観した事を話していたが、最近、行政整理の噂があり、自分も行政整理で解雇されるのではないかと悲観の様子で、幾分精神に異状を来していたが、28日夜半ソット宿舎を抜け出し、大甲街の町外れの驛街の池に行つて、ザブンとばかり、身を投げて自殺を遂げたは気の毒である。29日の朝、附近を通行した本島人が、死骸を發見し、大騒ぎとなり、大甲郡警察課に届け出たが、既に時間も経つていたので、係官が現場に赴いた時は、既に硬直がきてたそうである。(30日臺中電話)」と掲載している。

大正13年12月31日台湾日日新報(永山英樹・澤田寛旨両氏提供)

業種	商号	責任者
医師	體仁堂	李潤嘴
昭和5年の大甲街商工業者名簿(大甲鎮誌引用)		

今回の行政整理に行末を悲観して
信望厚き老教育家
池に投身自殺す

久しく教育の任にあり、曾ては25年勤続の良教員として、その筋から表彰されていた身も、年の暮れに押詰り、人は皆新しき歳を迎へる準備に忙しい28日の夜も更けてから、池に身を投げて死んだ教育家があった。それは大甲公学校の教員心得志賀哲太郎(61)である。同氏は、かねてより頗る清貧精励の人で、稀に見る教育家として、生徒の父兄からも常に信頼されていた。それで若しも、父兄等の家庭が貧しい場合には、自分から金を出して与える等の感ずべき事は数々あったが、同氏には元来妻女もなく、子供もなく、平常は宴に暢氣であったが、年瀬になって自分の将来を考へて、時折同僚に対し、悲観した事を話していたが、最近、行政整理の噂があり、自分も行政整理で解雇されるのではないかと悲観の様子で、幾分精神に異状を来していたが、28日夜半ソット宿舎を抜け出し、大甲街の町外れの驛街の池に行つて、ザブンとばかり、身を投げて自殺を遂げたは気の毒である。29日の朝、附近を通行した本島人が、死骸を發見し、大騒ぎとなり、大甲郡警察課に届け出たが、既に時間も経つていたので、係官が現場に赴いた時は、既に硬直がきてたそうである。(30日臺中電話)」と掲載している。

18 遺書・遺品

哲太郎は、遺書に「近来神経衰弱症にかかり、心神日々に衰へ、更に往日の意気なく、かくして尚、職に留まるは、上御一人（天皇のこと）に対して相濟まず。又、父兄に対しても申し訳なし」と書いている。天皇、父兄に対する謝罪の言葉は、哲太郎の責任感の強さの表れである。

遺言として、

- 一、遺体は台湾式の土葬にすべし
- 二、書物は太甲街民に寄付すべし
- 三、遺産は女中ソデに給えるべし

とあった。

この遺書は、どのようになったか判明していない。

哲太郎の遺品は、

- 書籍約1000冊
- 酒入れの瓢箪
- ウォルサム製の懐中時計
- 勤続十五年以上の第20回始政記念日に授与された木杯
- 勤続十三年の厄払い祝賀で教え子教師らからもらった銀杯
- 急須
- 湯呑茶碗
- 短刀
- 総督府徽章
- 褒賞
- 職場で使用した印鑑
- 梅鉢紋入り羽織
- 漢詩（上野齊作）
- 二十五周年祝賀会で撮影されたと思われる写真

であり、現在残っているのは、羽織、印鑑、写真及び漢詩の4点である。

また、哲太郎は、妹ミノの長男光男に、たくさんの書籍を送っている。当時は書籍は高価で貴重なものであったので、光男は友人たちに呼びかけ「輪読会」を行った。これらの書籍は、光男が朝鮮に渡り、その後、他界したため、その存在は不明である。

 <p>銀杯 木杯 ウォルサム時計? 酒入れ 急須 短刀 湯呑 遺品</p> <p>寄贈された遺品「大甲老照片專輯二」引用</p>	 <p>家紋</p> <p>梅鉢の家紋入り羽織（澤田寛旨氏提供）</p>	
 <p>妹ミノの長男 澤田光男 （満鉄勤務）</p>	 <p>哲太郎の印鑑 （澤田寛旨氏提供）</p> <p>澤田家所蔵の写真 （澤田寛旨氏提供）</p>	